



## 自閉性発達障害児のための関係行動分析マニュアル： 対人・対物関係面からの発達診断の試み

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-07-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小笠原, 詠子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.32150/00007871">https://doi.org/10.32150/00007871</a>

# 自閉性発達障害児のための関係行動分析マニュアル

## ——対人・対物関係面からの発達診断の試み——

小笠原 詠 子

本論文は、障害児の治療や教育をより効果的に進めるために開発された行動空間分析法の分析手順について詳細にまとめている。行動空間分析法は、対人関係行動・対物関係行動を主軸として障害児の行動分析を行う。自閉性発達障害児の場合、他者との関係がとりづらく、興味が著しく偏っているといった問題をもっているといわれている。このような自閉性発達障害児の対人関係行動・対物関係行動の評価がなされることは、子どもの状態を把握し、治療や教育の成果を把握する上で意味のあることと考える。行動空間分析法は、「行動の流れにおいてとらえること」、および「関係の脈絡の中で子どもの表出行動をとらえること」の二つの分析視点を設定している。これらの視点をふまえ、分析対象者が「いつ」「どこで」「だれと」「何をしたか」という一連の関係要素を一つのユニットとして扱っている。分析にあたっては、VTR資料を再生する形で行われ、5秒間の分析単位時間を設定し5秒毎に分析を行っていき、「いつ」という関係要素が把握される。また、プレイルーム内の空間分割を行い、「どこで」という関係要素を把握し、活動の中心と一致しているかどうか、あるいは主要なセラピストと近い位置にいるのかが把握される。さらに、関係カテゴリーを設定し、対人関係・対物関係の把握をし、「だれと」「何をしたか」が把握される。このようにして得られた結果は、行動空間別集計表あるいは関係カテゴリー別集計表としてまとめられ、対象事例の対人・対物関係行動の発達の様相を把握するてがかりとすることができる。

(キーワード：行動空間分析法、関係カテゴリー、行動空間)

### I はじめに

自閉性発達障害児の多くの場合、その問題症状として他者との関係がとりづらく、興味が著しく偏っているということがよくいわれる。そして、そのためにコミュニケーション障害に陥ることもしばしばみられる。われわれはこれまで、自閉性発達障害を背景にもつコミュニケーション障害幼児に対して、行動空間療法による指導実践を進めてきている(後藤・小笠原・後藤・福原, 1984)。行動空間療法では時間と空間を他者と共有する中で生起する行動を重視し、その行動が生起しやすいような場を設定していくところに力点がかけられている。したがって、かかわり行動の生起とその方向を示唆するような場の設定とセラピスト集団の動きが要求される。この指導方法ではつぎの三点が基本的枠組としてあげられている。①物理的場の構成：具体的にはプレイルームの中央に2段の舞台を設定し、空間が構造化されやすいように配慮されていること。②遊具の選定：遊具(大型組み立てブロック)を限定し、人とのつながりや集団としての動きをおこしやすい状況作りを意図していること。③心理学的場の構成：指導の流れをバックグラウンドミュージックによって子どもに意識づけ、つぎの活動への準備性を高めるように工夫していること。さらに、チーフセラピストがセラピスト集団の動きを統御し、子どものかかわりの中で全体の活動の流れを方向づけ、凝集化さ

せる中でより密度の高い行動空間が構成されるよう工夫されていること。

以上が行動空間療法の指導骨子であるが、この療法ではコミュニケーション能力の育成に主眼がおかれ、対人関係行動の量的な増加と質的な高まりを目標としている。この療法がさらに意味のある指導理念を生み出すためには、この方法による指導実践を的確に把握し、評価できる枠組が構築される必要があった。そこでわれわれは、行動空間分析法を開発し、小集団場面における各構成員の関係行動の構成度を測定し、指導の推移を分析してきている(後藤・小笠原・後藤・福原, 1983; 小笠原, 1983; 小笠原・後藤, 1989)。

行動空間分析法は二つの分析視点を設定している。第一の視点は、「行動の流れにおいてとらえること」である。たとえば自閉児の行動はともすればわれわれの予期する行動パターンをとることが少なく、そのため一般的なかかわりの範囲になかなか入りづらい特徴をもっている。しかし、このことはわれわれの行動枠でとらえた時に、ある種の違和感として生じてきているもので、子どもの行動を断片的にはではなく、時間の流れにそってひとつの行動の流れとして見た場合、一見、不可解とも思われる行動にもその子どもなりの行動の枠組と理由をもっている場合がある。一般に、子どもの行動や発達を把握しようとする場合、その行動や発達の様相を「結果」として提示する場合が多い。しかし、その結果に至る「プロセス」についてはほとんどふれられていない。臨床的

取り組みにおいては、むしろ、後者の側からの情報が大切なように思われる。同様に、臨床実践そのものの資料の集積においても、その時その時の指導の結果のみに注意を奪われるのではなく、ひとつひとつの取り組みの様相をていねいに時間軸にそって整理し、その脈絡の中で障害児の行動の変容を把握していくといった姿勢があってよいように思われる。第二の視点は、「関係的脈絡の中で子どもの表出行動をとらえること」である。表出行動が弱く、あるいは拡散的であればあるほど、その子どもの行動はわれわれの判断枠で処理できる範囲を越えてしまう。この問題を克服するためにはできるだけその子どもの表出行動を対人関係や対物関係との対応の中でとらえる視点が必要である。そのことによって、その表出行動がどの程度有効性をもっているかが見えてくると同時に、その子どもなりに目に見えない系をはりめぐらして周囲の事物や人とつながりをとろうとしている様相を把握することが可能となろう。さらにまた、このような関係的視点を導入することによって、セラピストが障害児の行動を補完している様相も浮きぼりにされてくるものと思われる。このような視点からの行動把握と指導のアプローチこそが子どもの関係行動系の安定化とひろがりにも貢献するものと思われる。

これらの視点をふまえ、行動空間分析法では、分析対象者が「いつ」「どこで」「だれと」「何をしたか」という一連の関係要素を一つのユニットとして扱っている。現在のところは行動空間療法による臨床場面の分析のみを行っているが、これら一連の関係要素の把握は、行動空間療法に限らず他の指導技法による臨床場面の分析にも有用であると考えられる。

## II 分析法の枠組

### (1) 分析単位時間の設定

その日の指導時間全体を塊としてとらえず、その指導時間内の推移を把握するために分析単位時間を設定している。つまり、一回の指導時間を30分と設定した場合、その30分間の指導を時間によりいくつかの分析単位に分けて、30分間の指導における構成員の活動の推移を把握することを目的として設定している。分析単位時間については、これまで5秒単位、10秒単位、15秒単位で検討がなされてきたが、以下の三点の研究結果により、行動空間分析法の基本的分析単位時間は5秒と決定された(小笠原詠子・後藤守, 1989)。

①対人関係行動のみについての分析であれば分析単位時間10秒、15秒の分析でも有効であるが、I型からVI型までのすべての関係カテゴリーについての分析では分析単位時間が5秒でなければ信頼性の高い資料を得ることができない。

②指導場面でかかわりのあったメンバーの分析結果を

対応させて見たところ、高い対応性のある資料を得るためには最大限、分析時間を延長させても10秒が限界であることが明らかにされた。

③分析不能となったものの内容分析を通して、分析単位時間の検討をした。その結果、行動空間の分割の仕方や指導方法の工夫によって分析単位時間を大きく区切ることが可能であるが、あらゆる条件に対応させて行動空間を特定していくとすれば、分析単位時間は5秒という結果となった。

したがって、分析単位時間を5秒とした場合は、30分間の指導は360コマの分析単位の資料で構成員の活動の軌跡が得られることとなる。この経時的に並べられた一連の分析コマにより、関係要素のひとつである「いつ」という要素が把握される。

### (2) 行動空間の設定

行動の軌跡を浮きぼりにするためには指導場面の空間分割が必要である。この空間分割により分析対象事例が活動空間を他者と共有しているかどうかはわかり、4つの関係要素のうち「どこで」という要素が把握される。

空間分割に際しては、どのような指導技法を行っているかといった指導の流れや活動内容によりさまざまな空間分割パターンが考えられよう。ここでは行動空間療法による指導場面での空間分割の考え方について述べていきたい。行動空間療法の指導の流れはチーフセラピストにより作られる。指導の前半では各構成員の活動を重視し、セラピスト集団は子どもが他者と遊具を介してかかわるといった、できるだけ構成度の高い活動内容になるように配慮したかかわり行動をとっていく。指導の終盤にいくにしたがって、前半部分での個々人の活動がより系が合わさるように自発的にチーフセラピストを中心としたひとつの活動へと凝集していき、構成員全体が時間と空間を共有したかかわり行動がとれるようにしていく。このような指導の流れをもとにプレイルームの空間分割を行うと、図1のようなになる。行動空間療法では前述したように、プレイルーム中央に2段の舞台(270センチ×270センチの方形のもの、半径180センチの円形のもの)を設定し空間が構造化されやすいように配慮されている。実際の指導場面では、指導の終盤になるとこの舞台上でチーフセラピストを中心としたひとつの活動に凝集化される。この舞台上に構成員全員が集まると、空間内での人口密度が高まりかかわり行動が生起する確率が高くなる。そこで、この舞台上の空間をCommunicative Space(以下Co空間という)と名付けた。一方、Co空間を取り囲むかたちで分割されている空間をRound Space(以下Ro空間という)と名付けた。Ro空間は指導前半での個々人の活動の場となり、個別の対人関係行動の充実の場となる。このようにプレイルームの物理的側面から、あるいは指導の流れや活動内容といった機能

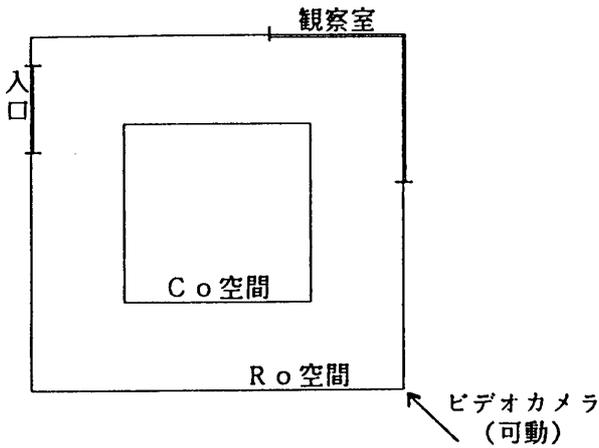


図1 行動空間

的側面からの空間分割が考えられる。ここではCo空間、Ro空間の二空間に空間分割をしているが、構成員の行動の軌跡を明細度高く把握する場合には、さらに細かく空間分割をする必要もあろう。たとえば子どもによっては壁際から動かず、なかなかプレイルーム中央部へ出てこない場合がある。このような場合はRo空間の壁際部分に空間（われわれはNative Spaceと名付け、Na空間とよんでいる）を設定する。また、子どもの行動の軌跡を細かく浮きぼりにする場合は、座標軸のようなかたちで分割線を入れ、4つの象限を設定する。いずれにしてもプレイルーム内で構造的にも機能的にもアクセントのかけられた場があれば、それが浮きぼりにされるように配慮した行動空間の設定が求められよう。

(3) 関係カテゴリーの設定

集団場面における個々の構成員が、どの程度有機的に他の構成員（他の子どもやセラピストたち）とのかかわりを有しているか、あるいはプレイルームの中にある遊具などをどの程度行動の中に組み入れているかを明らかにするために、関係カテゴリーを設定している（図2）。この関係カテゴリーでは、4つの関係要素のうち、「だれと」、「何をしたか」という2つの要素が把握される。関係カテゴリーは、本人（分析対象者）、本人とかかわりをもつ人（分析対象者以外の構成員）、遊具の三者から構成されている。ここでいう本人とは、集団の様相を明らかにするために分析にあたって操作的に、分析の中心の対象となった特定の構成員ひとりを指す。関係カテゴリーは、I型からVI型までの6つの基本型から成っており、II型のみII a型とII b型の2タイプにわかれている。各関係カテゴリーは三者を結ぶ線上に○印や×印がつけられているが、これは線で結ばれた両者の間に関係がある場合（○印）と両者の間の関係がない場面（×印）を示している。

《関係カテゴリーI型》本人が相手と共通の遊具を介在

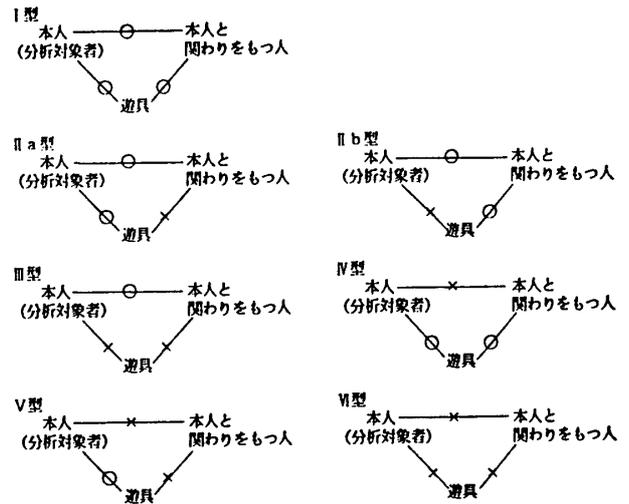


図2 関係カテゴリー

させてかかわりをとっていることを示している。たとえば、本人が相手とブロック（遊具）の受け渡しをすれば、ブロック・カーと一緒に乗っているとといった行動がこれにあたる。

《関係カテゴリーII型》前述のようにII a型とII b型にわかれている。関係カテゴリーII a型は本人が遊具をもった形で相手とかかわりをとっているが、本人のもつ遊具がその相手とかかわりがない場合に採用される。たとえば、本人がブロック・カーに乗りながら相手に声をかけているとか、本人がブロックを相手に差し出しているが相手が受け取らないといったものがこれにあたる。この時、相手の遊具の有無は問わない。一方、関係カテゴリーII b型は、本人が遊具をもっていない状態で遊具をもった相手とかかわりがある時に採用されるカテゴリーである。たとえば、本人は遊具をもたない状態でブロック・カーに乗っている相手に声をかけるといったものである。

《関係カテゴリーIII型》遊具をお互いにもっていない状態で、本人と相手がかかわりをもっている場合に採用される。たとえば、遊具をもっていない状態で声がけであるとか、身体接触などがこのカテゴリーに入る。

《関係カテゴリーIV型》ある1つの遊具に対して本人と相手がそれぞれ別々にかかわりをもっているが、本人と相手とはかかわりがとれていない場合に採用される。これは分析の中ではほとんどでてこないまれなカテゴリーであるが、理論的に考えられるカテゴリー型であるので関係カテゴリー群の中に組み入れられている。たとえば、お互いに背中あわせになっている状態で同じブロックに触れていて、お互いにそのことを知らないといった場合などがこのカテゴリーに分類される。

《関係カテゴリーV型》本人が遊具のみとかかわっていて、他の構成員とはかかわっていない場合に用いられる。たとえば、ひとりでブロックを積み重ねているといった活動がこれにあたる。

《関係カテゴリーVI型》本人が、他の構成員とも遊具ともかかわらずにいるものである。たとえば、プレイルームの中をひとりでぶらぶら歩きまわっているとか、窓の外をじっと見ているといった行動などがこのカテゴリーに分類される。

以下、関係カテゴリーについて説明してきたが、この関係カテゴリーの枠組を通してプレイルームにおける各構成員間の関係的様相を分析していくわけである。

### III 分析方法

#### (1) 分析対象資料の収集に関する留意点

資料の収集に関しては以下の点について留意する必要がある。

##### ①分析単位時間を意識した録画をすること

分析単位時間は5秒間であるが、その5秒間に構成員全員の活動が録画されていなければならない。ビデオカメラは、広角レンズを取り付けてプレイルーム全体を一視野に入れられるものを使用するか、あるいは可動式のもので5秒間の全構成員の活動をフォローできるものが望ましい。また、5秒単位の分析を行うので、タイムコーダーを接続し、再生画面上に秒単位まで日時が入るようにする必要がある。

##### ②プレイルームの物理的場の状態を一定にすること

分析結果により指導の推移を浮きぼりにするためには、毎回の指導開始時の状態を一定にしておく必要がある。特に、遊具の配置については十分注意する必要がある。なぜなら遊具の配置の仕方によって、プレイルームでの活動の展開が影響をうけることが十分予想されるからである。

##### ③分析担当者が指導場面を直接観察することの必要性

分析担当者は、分析するにあたって録画資料のみを見るのではなく、事前に指導場面を直接観察することが必要である。分析担当者が観察室からプレイルームの状況を観察し、プレイルーム内の構成員のその日の服装や活動の様子、指導の流れや場全体の雰囲気記録し、ビデオ資料の分析の精度を高めるように努めることが大切である。また、指導担当のセラピストからその日の指導について報告を求めたり、記録を作成してもらうことも後の分析結果の読みとりをする際に有効である。

#### (2) 分析要領

分析の実際の手順については、表1の記録表に沿って説明していくこととする。この記録表は欄が横に25個あり、1枚で各構成員の2分間の分析が記録できるようになっている。表1の記録表はセラピスト4名、子ども3名の分析用の表である。

##### ①各構成員の名前の記入

表1は、構成員が7名の場合の記録表である。メンバーの1番から7番までに構成員の名前を記入する（ここで

はセラピストA～D、障害児E～Gとしている）。

##### ②分析単位時間の記入

分析単位時間を時間の欄に記入する。表1では、午前10時12分43秒に構成員全員がプレイルームに入室したため、この時間を分析開始時間としている。行動空間分析法では分析単位時間が5秒間であるので、5秒毎の秒数を記入していく。この用紙は1枚で2分間の記録ができるようなっているため、最後は10時14分43秒となる。たとえば30分間の指導であれば、15枚の用紙が必要であり、各構成員毎に360コマの記録資料が得られることとなる。各構成員の記入欄は2段になっている。上段はCo空間での活動を記入し、下段はRo空間での活動を記入する。

##### ③分析

行動空間分析法では行動の流れを重視していることから、一人目の事例の分析が終了してから二人目の事例の分析に入ることにしている。したがって、セラピストA（チーフセラピスト）を最初に分析する場合は、セラピストAの分析を指導終了まで行ってから、次の構成員の分析を行う。

分析では関係カテゴリーの確定と行動空間の確定がなされ、記録表に記入される。分析対象となっている5秒間における分析対象者（本人）の関係行動の記録は、関係カテゴリーの確定により行われる。各関係カテゴリーの内容については、前述の説明を参照していただきたい。表1の各コマ内には各構成員のその5秒間に生じた関係行動の関係カテゴリーが記入されている。記入されているものの意味は以下の通りである。

- ・I～VIの記号は、関係カテゴリー型を示す。
- ・関係カテゴリーの次の数字（“-”の前の数字）は、各構成員の番号を表す（対人関係系）。
- ・最後の数字（“-”の後の数字）は、遊具の番号（1番はブロック）を表す（対物関係系）。

たとえば、“V 0 - 1”と記入されている場合は、関係カテゴリーV型で、他者とのかわり無く遊具（ブロック）とのかわりのみの活動であることがわかる。また、“II a 2 - 1”と記入されている場合は、本人が関係カテゴリーII a型で、2番の人（セラピストB）とかわっている。その時、本人は遊具（ブロック）を有しているが、本人とかわりのある2番の人（セラピストB）は本人の有している遊具とのかわりは無い。

関係カテゴリーの確定後に、行動空間の確定がされる。すなわち確定された関係カテゴリーの活動の生じた行動空間が採択されて記入される。

表1は、分析での最初の記録用紙となることより、より多くの情報が記入されている。たとえば、障害児Eの12分48秒から53秒の5秒間での関係カテゴリーは、Co空間とRo空間の両方に記入されている。これは障害児

表1 分析記録表

メンバー		10時12分												13分												14分											
		43°	48°	53°	58°	03°	08°	13°	18°	23°	28°	33°	38°	43°	48°	53°	58°	03°	08°	13°	18°	23°	28°	33°	38°	43°											
1. セラピストA (チーフ)	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V10-0	V0-1																																
2. セラピストB	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	IIa6-1																																	
3. セラピストC	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V0-1	IIa5-1	V0-1																															
4. セラピストD	Co																																				
	Ro	IIa5-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1											
5. 障害児 E	Co			V10-0	V10-0	IIb3-0	V10-0																														
	Ro	IIb4-0	V10-0	V10-0			V10-0		V10-0		V10-0	I3-1	I3-1	IIb4-0	V0-1	I3-1	IIa7-1	IIa2-1	I1-1	I2-1	V0-1	I3-1	I2-1	I1-1	I3-1	I4-1											
6. 障害児 F	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	IIa2-1																																	
7. 障害児 G	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0											

表2 集計用記録表

メンバー		10時12分												13分												14分											
		43°	48°	53°	58°	03°	08°	13°	18°	23°	28°	33°	38°	43°	48°	53°	58°	03°	08°	13°	18°	23°	28°	33°	38°	43°											
1. セラピストA (チーフ)	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V10-0	V0-1																																
2. セラピストB	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	IIa6-1	IIa6-1	IIa6-1	IIa6-1	N.A.	N.A.	N.A.	V0-1	V0-1	V0-1	IIa6-1	IIa5-1	I5-1	V0-1																				
3. セラピストC	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V0-1	IIa5-1	V0-1																															
4. セラピストD	Co																																				
	Ro	IIa5-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1	V0-1											
5. 障害児 E	Co					IIb3-0	V10-0			V10-0																											
	Ro	IIb4-0	N.A.	N.A.			N.A.	N.A.	N.A.	I3-1	I3-1	IIb4-0	V0-1	I3-1	I4-1	N.A.	V0-1	I3-1	N.A.	I1-1	I3-1	I4-1	N.A.	V0-1	V0-1												
6. 障害児 F	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	IIa2-1																																	
7. 障害児 G	Co																																				
	Ro	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0	V10-0											

EがRo空間とCo空間（舞台上）を他者とかかわらず遊具も持たずにふらふら歩いていたのを表している。また、障害児Eの13分48秒から53秒の5秒間では、2種類の関係カテゴリー型で3名の構成員とかかわっていることを示している。

④対応性の確認

全構成員の分析が終了すると、構成員間の関係カテゴリー型の対応性のチェックを行う。かかわり行動のあった両者には、関係カテゴリー型に対応性が見られる。たとえば、本人が関係カテゴリー I 型のかかわり行動で他

表3 関係カテゴリー別集計表

関係カテゴリー 分析対象者	( )内は%								
	I	II a	II b	III	IV	V	VI	N.A.	計
セラピストA	4 (16.7)	6 (25.0)	0	0	0	11 (45.8)	3 (12.5)	0	24 (100.0)
セラピストB	3 (12.5)	6 (25.0)	0	0	0	10 (41.7)	2 (8.3)	3 (12.5)	24 (100.0)
セラピストC	7 (29.2)	2 (8.3)	0	0	0	14 (58.3)	1 (4.2)	0	24 (100.0)
セラピストD	6 (25.0)	4 (16.7)	0	0	0	14 (58.3)	0	0	24 (100.0)
小計	20 (20.8)	18 (18.8)	0	0	0	49 (51.0)	6 (6.3)	3 (3.1)	96 (100.0)
障害児E	8 (33.3)	0	3 (12.5)	0	0	4 (16.7)	2 (8.3)	7 (29.2)	24 (100.0)
障害児F	3 (12.5)	5 (20.8)	4 (16.7)	0	0	1 (4.2)	10 (41.7)	1 (4.2)	24 (100.0)
障害児G	3 (12.5)	0	2 (8.3)	0	0	8 (33.3)	9 (37.5)	2 (8.3)	24 (100.0)
小計	14 (19.4)	5 (6.9)	9 (12.5)	0	0	13 (18.1)	21 (29.2)	10 (13.9)	72 (100.0)
総計	34 (20.2)	23 (13.7)	9 (5.4)	0	0	62 (36.9)	27 (16.1)	13 (7.7)	168 (100.0)

の構成員と関係していた場合は、本人の欄に“I型”が記入され、相手の欄にも“I型”が記入される。本人が“II a型”の場合は、相手は“II a型”か“II b型”のいずれかである。本人が“II b型”の場合は、相手は“II a型”である。本人が“III型”の場合は、相手も“III型”である。本人が“IV型”の場合は、相手も“IV型”である。関係カテゴリーV型と関係カテゴリーVI型については、対人関係がなく単独で存在するのでこの限りではない。

また、かかわり行動のあった構成員の対応性についても同時にチェックする。分析結果に対人関係が見られた場合は、その関係の有った両者の同じ5秒間の欄内にお互いの番号が記入される仕組みとなっている。表1の例でいくと、指導開始直後の12分43秒から48秒の5秒間では、セラピストDと障害児Eがかかわりを持っている。その場合セラピストDの欄には相手である障害児Eの番号(5番)が記入されており、障害児Eの欄にはセラピストDの番号(4番)が記入されている。この構成員の番号により、対人関係の分析間違いや、記録用紙への記入間違いを確認し訂正することができる。

#### ⑤集計用記録表の作成

表2は、集計表を作成する前の集計用記録表である。これは表1の分析記録表をもとに作成されている。集計用記録表は、集計表での1回の指導における各構成員の総コマ数を同じにするために、5秒間を代表しうる関係カテゴリーを確定し、その行動空間を確定する。5秒間に複数の関係カテゴリーが記録されている場合は、その中で1番構成度の高い関係カテゴリー型が採択され、その関係カテゴリー型が生じた空間が行動空間として採択される。しかしながら、同じ構成度の関係カテゴリー型で他空間へ移動した場合は、行動空間の確定ができないために、そのコマは分析不能のコマとなる(集計用記録表の欄内の“N.A.”である)。このように分析不能のコマができたり、構成度の低い関係カテゴリー型が消さ

表4 行動空間別集計表

行動空間 分析対象者	( )内は%			
	Co	Ro	N.A.	計
セラピストA	0	24 (100.0)	0	24 (100.0)
セラピストB	0	21 (87.5)	3 (12.5)	24 (100.0)
セラピストC	0	24 (100.0)	0	24 (100.0)
セラピストD	0	24 (100.0)	0	24 (100.0)
小計	0	93 (96.9)	3 (3.1)	96 (100.0)
障害児E	3 (12.5)	14 (58.3)	7 (29.2)	24 (100.0)
障害児F	6 (25.0)	17 (70.8)	1 (4.2)	24 (100.0)
障害児G	8 (33.3)	14 (58.3)	2 (8.3)	24 (100.0)
小計	17 (23.6)	45 (62.5)	10 (13.9)	72 (100.0)
総計	17 (10.1)	138 (82.1)	13 (7.7)	168 (100.0)

れてしまうので、表1の分析記録表でみられた関係カテゴリー型やかかわりのあった両者の対応性は、減少する。したがって、表1の分析記録表の段階での対応性の確認は、大変重要なものとなる。

#### ⑥関係カテゴリー別集計表および行動空間別集計表の作成

前述の集計用記録表をもとに、関係カテゴリー別集計表と行動空間別の集計表を作成する。

表3は、表2の2分間をもとに作成した、各構成員の関係カテゴリー別の集計表である。また、表4は、各構成員の行動空間別の集計表である。このような表を作成し、その回の指導の内容を吟味したり、回を重ねる毎の指導の推移や指導対象事例の変化などを検討したりすることが可能となる。

#### 参考文献

- 1) 後藤守・小笠原詠子・後藤恵美子・福原真理子(1983): 行動空間分析法に関する方法論的検討, 北海道教育大学紀要(第一部C)第34巻第1号, 73-87
- 2) 小笠原詠子(1983): 集団指導場面における関係行動の推移に関する研究, —— 行動空間分析法による分析結果を中心として——, 北海道心理学研究第5号, 7-22
- 3) 後藤守・小笠原詠子・後藤恵美子・福原真理子(1984): 行動空間療法の体系化に関する研究, 北海道教育大学紀要(第一部C)第34巻第2号, 77-86
- 4) 小笠原詠子・後藤守(1989): 行動空間分析法の信頼性に関する研究——分析単位時間の検討を中心として——, 北海道教育大学旭川分校情緒障害教育研究紀要 第8号, 21-28
- 5) 後藤守・小笠原詠子・後藤恵美子・福原真理子(1991): 発達障害児のための行動空間分析法に関する研究, 北海道大学教育学部紀要55号, 33-45